会話に変化を生み出す試み—リフレクティングと「きく」こと

○末安 民生¹⁾, 西池 絵衣子²⁾

1) 佛教大学 保健医療技術学部 看護学科, 2) 兵庫県立大学 看護学部

「患者」、スタッフとの対話において看護を成り立たせようとしています。現実には臨床においては対話を阻む要因がさまざまにあります。自分の姿勢や態度、対応の方法がその原因ではないと思われることも少なくありません。会話の場がいきづまる経験は、看護師にとまどいや迷い、伝わらなさという葛藤を感じさせますが、臨床の場面では、時間などの制約もあってなかなか立ち止まって振り返ることが難しいです。

看護師の心のなかの閉ざされている情報としての「患者アセスメント」から、「患者」と看護師の相互の思いを共有しながらの「関係性のアセスメント」への広がりをもっていくためにも、会話の成り立ちが必要です。その成立のためには看護師個人の臨床経験や所属する組織の医療体制や職業習慣の影響から一度離れて、いわば「純粋な会話」、「会話のための会話」を研修のスタイルによって積み重ねる試みが必要であると考えるようになりました。

企画者らは、これまで精神科領域の現場や現任教員において、事例検討などを試みながら、どのような方法であれば看護師が「患者」と出会い、その人の人生の物語と向き合うことができるのかを考えてきました。それまでの人間関係においては互いに気づかなかった「関係性の新たな一面」を見出すためにできることはなにかを臨床のあらゆる局面から試み、模索してきました。その経過の中で出会ったのが精神科医療の新たな試みであるオープンダイアログであり、

リフレクティングでした。幸いフィンランドでの研修や、その研修を担ってきた人とのロングインタビューを行うことで、わが国での臨床においても有益で意味のある活動を学ぶことができました。

リフレクティングは「会話についての会話」であり、参加者の「はなす」=外的会話(他者との会話)と「きく」=内的会話(自分との会話、あるいは自分の内なる他者との会話)という2つの会話を丁寧に重ね合わせながら展開していきます。本学会において昨年は、ワークショップで参加者のみなさんと内的会話と外的会話を意識したコミュニケーションを実践してもらい、安心して対話を続けるための方策を検討しました。

リフレクティングはわが国の精神科臨床においても活用されるべきだとは思っていますが、日本の文化や教育背景を踏まえどのような方法であれば効果的に臨床の看護師らに活用してもらえるか、対話という語り合いを繰り返すというあり方を伝えることは実はとても難しいのではないかと感じています。

そこで、今回のワークショップにおいては、精神科看護師を対象とした教育プログラムの一環として、事例を用いて参加者とケア困難場面についてリフレクティングを体験し、安心できる対話や場づくりについてディスカッションをしたいと思っています。倫理的配慮として、事例は模擬事例を用いることにしています。